

田子山富士塚の暦応3年(1340)板碑銘文

〈静岡県富士山世界遺産センター 学芸課 教授 大高 康正〉

埼玉県志木市本町の敷島神社境内にある田子山富士塚は、令和2年(2020)3月に国の重要有形民俗文化財に指定されました〔写真1〕。国指定の富士塚としては5例目となります。この富士塚は、古墳という伝承のあった「田子山塚」の上に約10mの土を盛って、明治5年(1872)6月に築造されたものです。



写真1

この富士塚が築造された経緯としては、発起人で後に富士講先達となる高須庄吉が、暦応3年(1340)の紀年銘の板碑を発見したことがきっかけとされています。この板碑は現在も富士塚の正面右側にある浅間下社に祀られています〔写真2〕。板碑は秩父青石を使用しており、上部などに欠損部分があるようですが、「瀧山千日富士峯前途入檀 阿闍梨耶承海十瀧房四十
五才逆修 暦応三年庚辰十一月日」という銘文が光明真言とともに刻まれています〔写真3〕。



写真2



写真3

なぜこの場所に上記の銘文をもった板碑が残されていたのでしょうか。『敷島神社縁起』には、大和国笠置山かさぎさんの僧承海しゅげん十瀧坊が天台宗の鈴甕山東光寺あんしつ とうりゅうの庵室で逗留した際にこの地を選んで奉納したとか、当山派修験の館村宝幢寺の住持承海が同寺の領内であったこの場所へ奉納したなどと伝えられていますが、いずれも根拠となった資料を確認することはできません。板碑の奉納者はこの志木市近辺に何らかの縁のある人物だったと考えるべきで、奉納場所についても奉納者との関係が深く、かつ信仰の場として機能していた可能性が高いことで選ばれたものと考えられます。

この銘文の解釈については、暦応3年(1340)11月頃に45歳を迎えていた承海(十瀧房)という僧が、この周辺の寺院に所属しており(あるいは彼の出身地といった所縁のあった場所なのかも知れません)、「瀧山千日」および「富士峯」への修行に向かう「前途」に、この地に「逆修」(生前に自分の死後の仏事をする事です)の供養のために板碑を奉納したものと考えられます。「瀧山千日」という文言は、和歌山県の熊野那智山(現在の熊野那智大社)での籠行こもりぎようを指すものと考えられます。つまり、那智山での修行は千日の籠行、富士山での修行は峯入り修行として各々を対比させた一文で、その後が続く「入壇」じゅかいは受戒をうけたものと考えられます。「富士峯」文言については、富士山中での峯入り修行として解釈するほかにも、山岳修行を行っていた場としての富士山を指す以上の意味合いは特に含まれていなかったという可能性を考えられるかと思えます。例えば、永承7年(1052)前後の平安時代中頃成立したと考えられている藤原明衡『新猿樂記』があります。この『新猿樂記』の前田育徳会尊経閣文庫伝来の正応6年(1293)加点本の「次郎条」に、山伏の苦行を紹介する一節があり、大峯・葛城・熊野・金峯・越中立山、伊豆走湯、根本中堂、伯耆大山、加賀白山、高野、粉河、箕面、葛河とともに「富士ノ御山」が登場します。ここに登場する「富士ノ御山」は、他の表記と同じく苦行を行っていた場所そのものを指しているものと思われます。また、同書の良本とされる同じ尊経閣文庫の康永3年(1344)書写本では、同じ部分を「富士御峯」と記しています。ここから、正応6年加点本の「御山」も、康永3年書写本の「御峯」も「ミタケ」と読んでいたことになると思われます。つまりは、暦応3年板碑銘文にある「富士峯」文言も、時代の近い『新猿樂記』康永三年本の用例と照らし合わせると、山岳修行を行っていた場としての富士山を指す以上の意味合いは特に含まれていなかったという可能性を考慮に入れておく必要はありそうです。

また、承海(十瀧坊)が受戒をうけた場所ですが、志木市周辺にあった寺院か、あるいは彼の師僧の所属する寺院であったものかは、この銘文の記載だけではわかりませんが、「瀧山千日」および「富士峯」への修行は、「逆修」の板碑を奉納して出立するほどの覚悟をもった陰しいものであったと言えます。こうした点からも、承海は既に長く修行を重ねてきた僧であって、出立前に何らかの行法の伝授を受けるために「入壇」したものと考えられます。この伝授とは、銘文に阿闍梨あじかりと記されることから、伝法灌頂でんぽうかんじょうを受けたものという可能性が考えられるのではないのでしょうか。

田子山富士塚へは東武東上線志木駅より徒歩25分ほど、志木駅東口からバスで約4分「富士道」下車、そこから徒歩5分ほどで到着できます。他地域の富士塚では、通常は入山できず7月1日の開山日など特定日のみ登拝できることが多いのに対して、こちらは田子山富士保存会



の熱心な活動により、年間を通じて「大安」「友引」は原則入山が可能で、他にも多くの「特別入山日」が設けられています。空気の澄んだような冬季など、天候次第で田子山富士の頂上から富士山を拝むことができます。詳しくは田子山富士保存会の HP をご覧ください。

【参考文献】

- ・竹谷靱負「富士塚前史を飾る代表的な現存富士塚」(『富士塚考』、岩田書院、2005 年)。
- ・城川隆生「竹谷靱負『富士塚考』」(『多摩のあゆみ』138 号、たましん地域文化財団、2010 年)。
- ・大高康正『富士山信仰と修験道』(岩田書院、2013 年)。
- ・鈴木雅史『富士山頂上の歴史』(エース出版、2015 年)。
- ・菊池邦彦「富士山村山口の集落と先達と登山道」(『富士山巡礼路調査報告書 大宮・村山口登山道』第4章第3節、静岡県富士山世界遺産センター、2021 年)。
- ・大高康正「暦応三年板碑銘文と富士峰修行」(『郷土志木』50 号、2021 年)。



静岡県富士山世界遺産センター